

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520482

研究課題名(和文)九州方言における条件表現の体系性に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Research on the System of the Conditional Expressions in Kyushu Dialects of Japanese

研究代表者

中田 節子(有田節子)(Nakata (Arita), Setsuko)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：70263994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：九州方言の方言固有の条件形式である「ぎ(-)」(「ぎっと」「ぎんた」等。限定の「きり」が起源とされている。以下ギで代表する)と共通語と同形の形式に着目し、その分布状況を調査した。佐賀ではギは最も一般的な条件形式で、予測的・事実的・反事実的・総称的条件文に加え、本来ナラ形式が担うはずの認識的条件文の一部にも分布する。一方、上甕、上天草、出水、佐世保では中高年層に使用が偏り、使用の優先度は高くない。これらの地域や周辺地域では、共通語のナラ相当形式が全年代に亘って分布し、共通語よりも守備範囲が広い。熊本を中心に、限定を表す別の方言形式「しゃが」が条件形式と共に現れ、ギに類する含みを表すことも示した。

研究成果の概要(英文)：We studied the distribution of the conditional forms peculiar to some Kyushu dialects, 'gi' and its allomorphs, 'gitto', 'ginta' etc. (hereafter 'Gi') compared with that of the same (or similar) conditional forms as standard Japanese. Gi is thought to originate from 'giri' (e.g. 'limitation'). We show that in Saga, Gi is the most popular conditional form across all generations, covering not only predictive, counterfactual and generic usages but also some epistemic usages, which are expressed by 'nara', or its allomorphs (hereafter 'Nara') in standard Japanese and in most dialects. Gi in Kamikoshiki, Izumi, Kamiamakusa and Sasebo, however, is mostly used by middle-aged and elderly groups, and even for them, Gi is not preferentially used. Nara is predominant in the aforementioned and neighboring areas. Nara has a wider coverage than Gi. We also show that the form-meaning limitation, 'syaga', conveys similar implications as Gi after conditional clauses, mainly in Kumamoto.

研究分野：言語学 日本語学

キーワード：条件表現 ギー 佐賀方言 九州方言 限定 認識的条件文 形式名詞 アスペクト

1. 研究開始当初の背景

条件文の類型論的研究において、世界の多くの言語が条件性を明示する傾向にあるとされているが、日本語のように基本形式が複数認められる言語は一般的ではない。条件性の標示に複数の言語形式が存在する日本語のメカニズムは複雑でありそれを明らかにしようとする多くの国内外の研究がある。

日本各地の方言においても共通語同様、基本的な条件形式が複数認められる。多くの場合、その形式は共通語と同じであるが、それぞれの形式の持つ用法が共通語と必ずしも一致しないことが報告されている。佐賀方言の「ぎ (-)」(以後ギと称す)は共通語の4つの基本条件形式のいずれにも関連づけられないという点で特異な位置づけにある。語源的にも限定を意味する「ぎり」に由来するとされており、条件形式とは無関係である。ギは、時制形式のすべてのパラダイムに後続するという点で完全時制節を導く条件形式である。同方言には、共通語の「なら」(以後ナラ)とその分布特徴の多くが重なる「ない」(以後ナイ)という形式もある。ギの使用はナイも併用するので、この方言の話者は二種類の完全時制節条件節を使い分けていることになり、両節に現れる時制形式の機能が問題になる。

2. 研究の目的

本研究は九州方言の条件形式の分布的特徴を明らかにし、方言特有の言語形式と共通語と同様の言語形式との間で世代差や共通語化においてどのような違いがあるのかを検証することを目的として行った。多くの言語において条件性が明示的に標示される傾向があり、仮定性の高さと時間指示の高い相関が通言語的に見られる、すなわち仮定性の高さが文法的に標示されるのに対し、日本語共通語では、仮定性の高さよりも、事態の真偽が定まっていること、その定まった真偽を話し手が知らないことが条件形式で明示されるという特徴がある。この研究を通して、こうした共通語の特徴が、九州方言の方言固有の条件形式において一層顕著になることを示し、日本語方言文法研究から条件文の言語学的研究に寄与することを目指した。

3. 研究の方法

まず、予備的に進めてきた佐賀方言のギ、ナイを中心とする条件形式の分布と、城島方言を始めとする近接する地域の方言の条件形式の分布について、予備調査よりさらに詳細な使用文脈を設定し、本格的な調査を行った。その際、世代差の有無についても分析できるように、調査対象をさまざまな世代の話者に求めることにした。世代差に注目するのは、ギのような方言独特の形式と、ナラのような共通語と同じ形式との間で違いがあるのかを明らかにすることで、文法面での「共通語

の影響」をはかることができると考えたからである。

調査は面接で行った。条件形式の使用文脈は、述語の状態性、動詞の意志性、テンス、アスペクト、モダリティ、などさまざまな要因が複雑にからみ合っているので、研究代表者、分担者のような文法を専門とする研究者による面接形式の調査が有効だと考えたからである。

ギという形式は佐賀市以外でも使われており、鹿児島県の出水市を含む地域、長崎県の諫早市を含む地域での使用が確認されている。このうち、諫早市の若年層一名に対する予備調査では、ギの使用は認められず、祖母が使っていたという証言が得られたので、老年層に対する調査を進め、ギが佐賀市以外の地域においてどのように使われているかを明らかにするために調査を実施した。

4. 研究成果

研究代表者は条件形式に前接する時制形式に着目し、基本形と夕形に接続する形式(「行くなら/行ったなら」)によって構成される節(「完全時制節条件節」)とそうではない形式(「行ったら」「行けば」「行くと」)によって構成される節(「不完全時制節条件節」)が事実性認識において区別されることを明らかにした。条件節事態の真偽が定まっているかどうか(「客観的既定性」)が条件節の時制節性に対応し、その真偽を話し手が知っているかどうか(「主観的既定性」)が条件節における準体形式(「の」)の出現に関わることを示した。日本語に限らず自然言語の条件文の意味分類においても「既定性」は有用な概念で、それにより「予測的条件文(predictive conditionals)」と「認識的条件文(epistemic conditionals)」が区別される。この2種類の条件文の区別は英語等の西欧語では条件文の解釈に依存するのだが、日本語では条件節の時制節性に対応しているという点が特筆すべきことからである。この成果の一部を代表者はイタリア日本語教育協会では日本語教育の観点から発表した。

代表者によるこの研究は、条件表現の歴史的変遷、地理的変異の諸現象には認識的条件文というカテゴリーとその表現を支える断定形式および準体形式が鍵になることを示唆している。すなわち、歴史的には中央語においてナラバ条件文が認識的条件文として成立・発達していくのと準体形式「の」を介する形式の事実と照合する用法の一般化が一体のものであること、方言研究の面では、方言文法全国地図を用いた俯瞰的な研究によって、認識的条件形式を表す形式の地域によるバリエーションが歴史的な変化の過程と符合する面が大きいことが日本語史及び方言研究者とのパネルディスカッションの中で明らかにされた。この成果の一部は学会誌にも掲載され、現在、論文集も企画されており、2015年の後半に出版の予定で準備が進

んでいる。

代表者および分担者は、九州方言の条件表現、特に、方言固有の形式ギが現れる地域で臨地調査を行い、地域毎の分布の共通性・相違性について調査研究を行った。方言文法全国地図 167 図での典型的な仮説条件の用法（「雨が降れば（船は出ないだろう。）」）においてギおよびその複合形式（「ギットー」「ギンタ」「ギンニャー」など）が出るのは佐賀県全域および、長崎県佐世保市、諫早市、熊本県天草市、鹿児島県出水市付近、甑島と点在している。それぞれの地域において自然談話を収録する一方で、面接調査を行っているが、ギ諸形式の用法は地域によりかなりの隔たりがあることがわかった。

佐賀ではギは優先して使用される条件形式の一つで、共通語のバ、タラのみならず、ナラの領域をも窺うほどの勢力を持っており、老年層だけでなく比較的若い層でもその使用が認められるが、他の地域ではギ諸形式の用法は狭く、しかも、他形式に優先して使われることは限定的で、その分布は地域毎に異なっている。天草を例にあげると、ギットーという形式は、167 図の調査文のような仮説条件や、反事実的条件、習慣を表す条件文にも使用は可能ではあるものの、主節が警告を表す文（「暗いところで本を読むと目が悪くなるよ。」）での使用（「クラカトコデホンバヨムギットーメノワルナルヨ。」）を除けば、ギットー以外の形式が優先される。天草におけるギットーには、条件節事態成立の蓋然性が低いという特別な含みが不可欠であることが明らかになった。その成果の一部を九州方言研究会、筑紫日本語学研究会で発表した。

最終年度には、佐世保出身者に対する調査も行った。佐世保においてかなり広くギが使用されていることが確認できた。

ギが使用される地域に隣接するがギを使わない地域の調査も行った。佐賀に隣接する城島地区では、ギは一切現れず、ナラが共通語の場合よりもはるかに広範囲にわたって使用されることがわかった。その影響が、認識的条件を表すのに、ナラだけでなく、アスペクト形式（「とる」）あるいは形式名詞（「と」）が補われる傾向にあり、とくに「と」は若年層に偏って分布することも明らかになった。この成果は、九州方言研究会、方言研究会で発表した。

熊本においても、ナラが優勢であるが、「しゃが」という方言固有の形式が条件表現と共に表れることが観察された。熊本にはギは現れないのだが、「しゃが」がギーに近い含みを持っていることが明らかになった。

分担者は認識的条件文と関連の深い形式名詞についての調査も進め、福岡方言においてノダ文に相当するト文の用法が共通語におけるノダ文の用法よりも狭いことが明らかになった。コピュラ文の有無とノダ文の用法に関連があることがわかった。

さらに「分」による副詞節の用法に関して

条件表現と理由表現の関係について記述的な研究を行い、条件の意味になる場合、理由の意味になる場合の条件を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

有田節子 (2015) 「『差し迫った命令』に対する覚書-日本語のテンスとモダリティの接点」『九州大学言語学論集』35, 382-397. (査読無)

Arita, Setsuko (2014). Conditionals and Modals in Japanese: 'Settledness' as an Interface between Tense and Modality. *ROCZNIKORIENTALISTYCZNY*, 117, 26-41. (査読有)

有田節子・江口正 (2014) 「上天草方言および甑島方言における条件表現について」『筑紫日本語学研究』4, 36-45. (査読無)

有田節子 (2012) 「複文研究の一視点-時制とモダリティの接点としての既定性-」『日本語文法』12-1, 43-64. (査読有)

〔学会発表〕(計 10 件)

有田節子 「日本語条件表現の諸相」外国語と日本語の対照言語学的研究招待講演 2015.3.7 東京外国語大学国際日本研究センター

有田節子 「日本語条件文における認識的条件文の位置づけ」公開シンポジウム「日本語条件文の諸相-地理的変異と歴史的変遷」2015.1.11 文京シビックセンター

江口正 「潜伏疑問名詞句の諸相」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会 2014.12.6 大阪大学

有田節子 「現代日本語文法における認識的条件文の位置づけ」日本語文法学会第14回大会 2013.12.1 早稲田大学

江口正 「間接疑問節をとる述語の類型と項構造」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会 2013.9.3 国立国語研究所

有田節子・江口正 「上天草方言および甑島方言における条件表現について」筑紫日本語研究会 2013.8.8 九重共同研修所(大分)

有田節子 日本語における認識的条件文の重要性 The 4th International Conference of the Italian Association for Japanese Language Teaching. 2013.3.21-23. Naple, Italy.

Arita, Setsuko. Conditionals and Modals in Japanese: 'Settledness' as an Interface between Tense and Modality. The 3rd International Conference of Oriental Studies: Exploiting Languages and Cultures of Asia. 2012.11.14-16. Cracow,

Poland.

有田節子・江口正「佐賀方言と城島方言における条件節と時制の機能について」第95回日本方言研究会研究発表会 2012.11.2 富山大学

有田節子・江口正「城島方言における条件形式の分布と機能について」九州方言研究会第34回例会 2012.9.1 九重共同研修所(大分)

〔図書〕(計 3 件)

江口正(2014)「主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 pp.143-167.

江口正(2013)「集合操作表現の文法的性質」藤田保幸編『形式語研究論集』和泉書院 pp.155-175.

Arita, Setsuko (2012). Doose as an Epistemic Modal Expression. B. Frellesvig et al. (eds.), *Studies in Japanese and Korean Linguistics*. Muenchen: Lincom Academic Publishers, pp. 1-27.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有田節子(大阪樟蔭女子大学学芸学部教授)

研究者番号：70263994

(2) 研究分担者

江口正(福岡大学人文学部教授)

研究者番号：20264707